

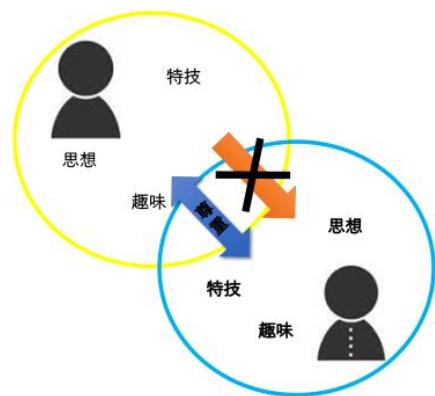
夏目漱石 「私の個人主義」と漱石作品との関連

2-4 1番 青木詩織

夏目漱石の個人主義

1. 自己の個性の発展をしあげようと思うならば、同時に他人の個性を尊重しなければならない

2. 自己の所有している権力を使用しようと思うならば、それに付随している義務というものを心得なければならない



3. 自己の金力を示そうと願うならば、それに伴う責任を重んじなければならない



漱石の数々の名作は、個人主義を反映している？実効性は？

目的

夏目漱石の提唱する個人主義は、作品内でどのように表れているのか。また、作品内で自己を確立し、幸せになれた者はいるのか。二つを照らし合わせ、漱石の考えた個人主義についてより深い考察をしていく。

1について

『こころ』より、先生に近づこうとする私に対する先生の発言

「とにかくあまり私を信用しては不可ませんよ。今に後悔するから。（中略）私は未來の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥けたいと思うのです。私は今より一層淋しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう」



調査

仮説Ⅰ：漱石は自身の個人主義を作品内に反映させている。

仮説Ⅱ：権力から逃れて独立した者は、自己を確立し、幸せになっている。

2について

『坊っちゃん』

権力者：赤シャツ 被抑圧者：坊っちゃん
関係性：教頭／教師

内容：自身の都合のいいように言葉で押し込めたり、捏造をしたりする。

変化：教師という職に不満を持つ。単純や真率が笑われる世に気づく。

結末：殴って反発をし、職を辞して東京に帰る。結果腹いせをしただけ。

『船が岸を去れば去る程
いい心持ちがした』

『虞美人草』

権力者：井上孤堂 被抑圧者：小野清三

関係性：恩師／養子

内容：養い、教育した代わりに、将来自分の娘と結婚することを約束させる。

変化：自らの恋と、過去の恩に迷う。

結末：自らの恋を諦め、結婚を認める。

『小夜子を捨てては済まんです。孤堂先生にも済まんです。僕が悪かったです』

『こころ』

権力者：父・母・兄 被抑圧者：私

関係性：家族

内容：就職先の催促。私と異なる価値観。

変化：考え方の相違から両者の間に距離ができる。家族よりも先生の方に興味がいく。

結末：父の最期を看取らず、先生のために東京へ帰ってしまう。

『私はあからさまに自分の考えを打ち明けるには、あまりに距離の懸隔の甚しい父と母の前に黙然としていた』

3について

悪辣な使用者への責任の追及

『坊っちゃん』

赤シャツ→坊っちゃん、山嵐、うらなりなど

行動：正当な理由なく教師の給料を増減させ、差別化を図る。

変化：坊っちゃんに小賢しい権力者への不信を植えつける。

『こころ』

叔父→私（先生）

行動：「私」の財産を横取りし、私腹を肥やす。

変化：「私」の人間不信を生むきっかけとなる。

金銭の貸し借りによるしがらみ

『それから』

長井（父）→代助

行動：息子に仕送りをする。代助は高等遊民となる。

変化：親子の間に人生観の違いが生まれ、意思のすれ違いが起こる。

『道草』

健三→島田、御常、姉、兄、妻の父

行動：お願いされ、お金を貸す。（健三自身も裕福ではない）

変化：健三夫婦の間に亀裂ができ、健三を憔悴させる。

『それから』

権力者：長井 被抑圧者：代助

関係性：父／息子

内容：自身の理念の強要。結婚の勧め。

変化：父の昔気質の篤い教育を疎み、親子仲が冷却する。家族と好きな女の間で揺れる。

結末：勧めを断り、好きな女と不倫。一家の名誉を傷つけたとして家族に絶縁される。

『彼は彼の頭の中に、**正当な道を選んだ**という自信があった。彼はそれで満足であった』

『道草』

権力者：島田・御常 被抑圧者：健三

関係性：養父・養母／養子

内容：本当の親だと教え込ませ、甘やかす。

変化：反発する精神を持ち、軽蔑する。また、幼心ながら、親切の中の欲に気づく。

結末：嫌々ながら従い、甘やかされたため、強情な性格に育つ。

『彼等から大事にされるのは、つまり**彼等のために彼の自由を奪われる**のと同じ結果であった』

考察

・個性の懸隔による「**淋しさ**」は漱石の個人主義の欠点であり、漱石はそれを自身の作品で示したといえる。

・多くの作品の主人公は被抑圧者であり、権力者目線の作品はこの5作品では見られなかった。

・坊っちゃんと代助は**自我を押し通し**権力から逃れることに成功したが、どちらも**収入源**を失ってしまった。

▶権力から逃れる代償に失われるもの

・権力に従った作品では、**自我と権力に従わざるを得ない現実**との葛藤が多く描かれていた。

・金力の表し方は悪利用に限らず、責任の所在は使用者に限らないことがわかる。

結論

漱石は作品の中で3つの条件を満たす人というよりも、錯綜する人間関係の中で「自我」を確立できない人や、確立できても現実で何かを失ってしまう人を描き、そこから**日本社会での「自我」の確立・自身の提唱する個人主義の難しさ**を示したと言える。

参考文献：夏目漱石『坊っちゃん』『こころ』『虞美人草』『それから』『道草』